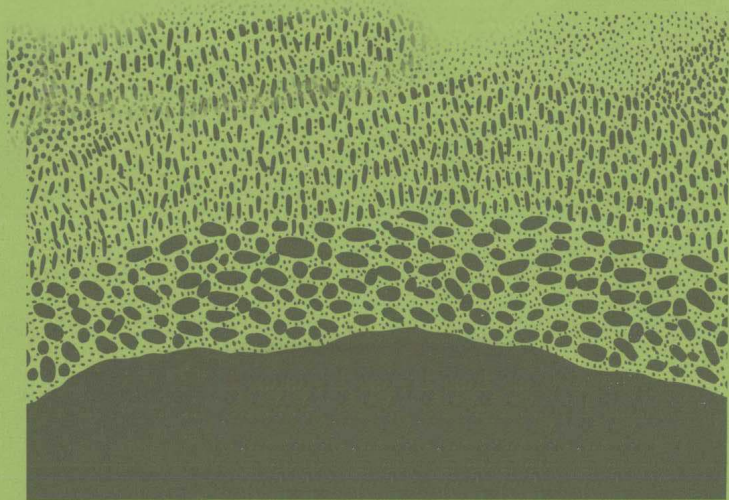


北へ
ズ

池

いけたかし

敬



北のバゲ

池 敬

池 敬（いけたかし）

岩手県に生まれる 本名・菊池敬一

岩手県児童文学研究会会長

東北古代史研究会「北天塾」塾頭

主な著書 「あの人は帰ってこなかった」（岩波新書）、「北国農民の物語」（講談社現代

新書）、「故郷の声」（小峰書店）、「あまれ村の人々」（家の光出版局）、「北

天の魁」（岩手日報社）等

岩手県和賀町在住

北のバゲ

発行 一九九一年二月二〇日

著者 池 敬

発行者 阿部慶司

発行所 株式会社青磁社

東京都千代田区神田北乗物町一七 北乗ビル

電話〇三（三二五六）八四二五 振替東京四一一七六一二一

印刷所 佐藤印刷

定 価 一、七〇〇円（本体一、六五〇円）

ISBN 4-88095-304-0

目 次

第一話	姫神	6
第二話	ノソケ峠	16
第三話	ナニャドヤラ	29
第四話	胡沙笛	43
第五話	鹿への幻想	53
第六話	ツボケの進群	64
第七話	金魂	74
第八話	黄金の谷	85
第九話	北のバゲ	95
第十話	鮭しぶぎ	105

第十一話 カシマ様 115

第十二話 御前溺 126

第十三話 カンパネルラ・田野畑 140

第十四話 鷺の巣川 148

第十五話 北上川の水荒れ譚 159

第十六話 片目の神さま 168

第十七話 東日流 177

第十八話 荒吐神 185

第十九話 沢内年代記 193

第二十話 如鱗 202

第二十一話 国境のブルイ 210

第二十二話 アムール 219

あとがき 230

北
の
バ
ゲ

第一話 姫神

学生のころから、山がすきでよく登った。岩手山、姫神、早池峰など、県下の名のある山を次つぎに踏破すると、それだけ自分が成長でもしたかのような気になったものだった。この中で、姫神山には、他の山と違って、一種独特な親しみを持っていた。盛岡市から近かったし、高さが一一〇〇メートルしかなくて、日曜などの日帰り登山に丁度よかった。また姫神というその名が、なんとなくロマンチックで、その端麗な姿が若者たちに秋波でもおくっているように感じられたものである。

好摩駅こうまから下車して、高原に上るとスズランが群生し放牧の馬がいた。白い夏服の女学生たちと声をかわすと、別の世界にでも来たように心を浮かして頂上をめざした。そして、岩ばかりの頂上に立って、その東に果てしなく連なる山の波を見渡すと、そこには未知の国が秘んでいるのだと感じた。それは若い血がぞくぞくする異性への憧憬に似た不思議な

思いでもあった。

この姫神への憧れの感情を更に確かなものにしたのに、堀切カナ子という女性のことの一つ加わる。

私が師範学校卒業間際に骨折事故で盛岡のS病院に入院した。この時、病院の中にずば抜けた美貌の看護婦がいた。堀切カナ子といった。彼女が通ると、そこだけが桜色に輝やいて見えるような気でベッドの中から眺めた。カナ子の出身地が、姫神の陰の村だという噂をきいて、なるほどと、変ななっとくをしたものだった。

だが、そんな青年期の夢は、間もなく戦争という時代の波にかき消されていった。私は戦場にかり出され、シベリヤに抑留され、敗戦後は這いずり回って生きつづけた。

それから三十数年が過ぎ去った。私はもう老境に入っていた。

初夏のある日、今度出版する本の挿絵の打ち合せで、画家の高野氏と盛岡のA喫茶店の三階で会った。

ふと気がつくと、北の窓にみごとに姫神山がはまって見えているのである。

「ほう、額縁に入った姫神山の絵というわけか」

私は思わず呟いた。するとメニューを持ってきた女の子が、

「これがうちの自慢なんですの」

と、笑顔をつくった。

私の心の中に、三十数年前の若い日の思い出が吹き出すように湧いてきた。スズラン高原、白い服の女学生たち、山の向こうに見た惚れの山里、そして堀切カナ子。私は窓の姫神に話しかけるようにつぶやいた。

「ヒメカミか」

向かいに座っていた高野が、低い声でいった。

「あなたも、姫神に思い出があるんですね」

「うーん。まーね」

私は高野を見た。高野も、顔にかかった長い髪を払いもせずに太い眼鏡の顔を窓に向けていた。私は、その高野の食い入るような目つきに、普通でないものを見た。

「あんたも姫神に思い出があるんですね」

高野は窓から目を離さずいった。

「はい。あるんです。あの姫神を見るたびにそれを思い出すんです。ひとには話したこと

がないんですが——」

「ほう。よかったら聞かせてくれませんか。絵かきのあなたなら、きっといい話だという気がするんだが」

「いやあ、いい話でもなんでもないんです。ただ、忘れることができない、というだけなんです」

そう前おきして、高野は語り出した。

三十年ほども前の、昭和三十年の春のことだった。

その年、高野は東京のT美大の受験に失敗した。だが画家への夢は絶ち切れなかった。毎日のように、近くの山や川に出かけては、もんもんとした心を抑えた。

山の緑が濃くなったある日、高野は釣竿を一本かついで、町はずれの丹藤川たんとうを上っていった。

「丹藤川を上っていくと、姫神の向うの別の国へ出る」

ただそれだけで孤独が癒されそうに思った。

高野は、ただひたすらにどこまでも上っていった。大きな滝を二度も這い上がった。

谷がひらけて、左手に山里が見えた。高野には人里などは必要なかった。人里をさけて、石の大きな谷川へと入っていった。

その谷は深かった。どこまで行っても、狭い空がつづいた。

川を上りはじめてから、もう七、八時間もたっていた。谷の底はいつの間にか薄暗くなってきた。

高野は、はじめてうろたえた。

「もう日が暮れるんだ」

谷の行く手を見ると、谷川は右に大きく迂回しているのが見えた。高野は夢中になって谷川を上っていった。

突然、目の前に赤い夕映えの空がひろがった。と、暮色につつまれた胡桃林の向こうに萱ぶきの一軒の家が見えた。

「家があるんだ」

高野は、助かったという思いで、その一軒家をめざして谷川を進んだ。

その萱ぶきの家に近づいた時、高野は思わず足を止めた。一匹の大きな黒犬が、唸り声をたてながらこっちに走ってきたのである。

高野はあわてて反対側の川岸に這い上がった。その時、高野は、若い女のををきいて思わず振り返った。

犬の後を追って、白いブラウスの二人の娘が走ってくるのが見えた。二人は犬をおさえると、高野に向かって呼んだ。

「こっちゃん来て！」

「なんでもないから、こっちゃん来て！」

高野はおそるおそる、谷川を越えて娘たちのところへ近づいた。

二人の娘が、ぞっとするほど美しく見えたのは夕映えのせいだけではなかった。高野は、二人の娘は、かくれ里のマタギの娘なのだと思った。別の世界の別な人種の娘たちだと感じた。それは、妖精を目のあたりに見たというような気分だった。

高野は、娘たちにすすめられて、その家に入った。

家の中は雑然としてはいたが、普通の農家と変わりなかった。

父親だという五十がらみの目の鋭い男が、囲炉裏に当たりながら、今日採ってきたらしい山菜を整理していた。男は、高野をじろりと見定めてから太い声でいった。

「釣りに来て、まよったのさべ」

そして仕事を続けながら、決まっていることでもいうようにいった。

「この春になってがら二人目だ。これから帰るごども出来めえ。泊ってげ」

高野は体を小さくしてやたらと頭を下げた。

男は急に顔を起こすと、高野を見据えるようにしていった。

「おまえ、オンジが（次男坊か）」

高野は必要以上に大きな声で「ハイッ」と返事をした。すると、食事の仕度を始めていた娘の一人が、甘えるような声で聞いた。

「家はどごなのス。川下の沼宮内スカ」

それにつづけて、もう一人の娘は、石油ランプを吊しながら聞いた。

「なまえはなんというのス」

高野はそれらに、小学生のように緊張して答えた。

もんだいは、その夜だった。

真っ暗い奥の部屋に一人寝かされたものの、眠れるものではなかった。自分は今、本当にここに居るのかと、幾度も自分で自分をたしかめたりした。

一時間ほどもしたら、目がだんだん暗闇になれてきて、あたりが薄ぼんやりと見えてきた。目の上のナゲシに額縁に入った一枚の写真が飾ってあった。女の写真だった。それがまるで今にも動き出すのではないかと思った。

と、その時だった。襖がスーッと開いたのである。高野は驚いて息を止めたとき、娘が一人白い下着のまま入ってきた。娘は静かに襖を閉めると、高野の床のわきへそっと寄ってきた。娘はくるっと着物を抜いで白い裸になったと見るや、高野の床の中にするりと入ってきた。

高野は、心臓が音をたて鳴るのをおさえて体を石のように固くした。

娘はクククと小さく笑いながら、高野の手を握ると、びらりと自分の胸の上に乘せた。高野は、いくら止めようとしても体のふるえるのが止まらなかった。

娘はいたずらっぽく、くぐもった声で高野の耳にささやいた。

「だましっこ、ねえっこにすっぺえナ」

裏切りっこ無しにしようね、という意味だったが、高野にはその意味を理解する余裕などなかった。

と、その時、また襖がスーッと開いたのである。すると娘は、「姉あ来た！」と小声で

言つて床の中にもぐり込んだ。

暗闇に立った娘は、じつと様子をうかがっていたが、鋭い声で、「ボコア、先に来たなっ！」と言ふと、襖をびしゃつと閉めて去つていった。

それから、高野は、不動の姿勢のまま、夢のような時間を過ごした。そして妹娘との間にも、そのまま何事もなく朝を迎えた。

朝霧の中を、高野が見送られて発つとき、妹娘は涼しい声でいった。

「ヤマベ釣りさ、また来て」

姉娘が走り寄つてきて、山から抜ける道はあの姫神を左に左にと見て下ればいい、と教えた。谷川を埋めた霧の上に、端麗な姫神の顔がうかんでいた。

高野の話が終わつたとき、私は姫神の伝説を思い起こしていた。それは、岩手山に恋をした、姫神と早池峰の二人の女神の物語だった。どちらの女神もその恋を遂げることが出来なくて、お互いに嫉妬し合うのだった。だから、姫神が顔を出すと早池峰は雲の中にかくれるし、早池峰が顔を出すと、姫神が雲にかくれるというのである。

私は、高野の眼鏡の底をさぐるように見ながらきいた。